



表

築120年の町家に訪れる機会があり、そこで写真のような松ヤニが出ている部分を見た。この状況を見て、「面倒、拭き掃除をしないとイケない」などのネガティブな感情を抱く人もいるでしょう。私は、この状況をポジティブに捉える。

生継間

～殺さず使い続ける生きた空間～

参 命名

そのような生きた空間を殺さずに使い続ける過程まで含めて、「和」と定め、【生継間】（せいけいかん）と名づける



式

半世紀ほど前までは、家の掃除といえば拭き掃除であった。拭き掃除を専門とする職種があったくらいだ。その際に、この松ヤニをふき取ってもらい、木でできた建具も拭かれていた。そして、その建具も120年経つ今でも衰えることなく使用されている。木の材料を保持するために拭き掃除をすることは大きな効果が期待できる。その一つ一つが細かい丁寧な所作が日本らしさといえるのではないだろうか。



線画

肆 対象敷地

対象敷地は、石川県加賀市大聖寺エリアとする。

かつて、日本に全国に町家と呼ばれる建物は多く存在していた。当時の町家には、ヒノキ、スギ、マツが使用されていた。それらの木材は、地域の気候や産地によって使い分けられていた。私は、京都の町家にも訪れたことはあるが、マツではなかった。そして、加賀市に訪れた際、マツを使った町家を体験した。そのため、加賀市を対象敷地とした。また、写真の通りは、半世紀ほど前まで、商店が並んでいた。住宅となると、プライバシーの問題で入ることは、難しいが、商店の一部なら他人にもこの提案は伝わると思い、設定した。



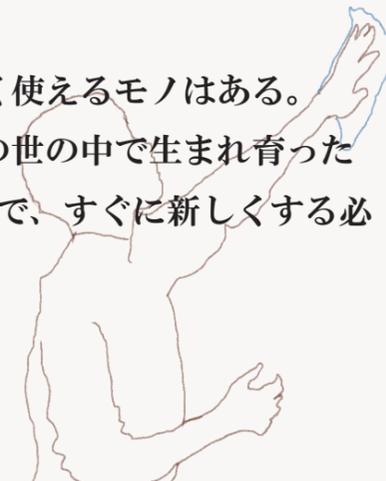
写真上
敷地広域
(赤い部分が
対象の町家
が並ぶ通り)

写真下
実際の通り

伍 現代において

現在、建設費の高騰、木材の高騰、職人不足などの問題が建築業界に襲い掛かっているが、今回の提案で、性能を追い求めて忘れかけている「モノを大切に使う、長く使う」などの考えを改めて見直すきっかけとなることを望む。

拭き取れば、使えるモノや拭き取ることで腐敗するのを防ぎ、長く使えるモノはある。日本で大抵のモノは、すぐを買えて、手に入る。それが当たり前の中で生まれ育った現在の20代以下の世代の若者にそれが「和」なのだと伝えることで、すぐに新しくする必要もないことに気づくことができるのではないだろうか。



陸 掃除の形態



機械化が進み、家庭で掃除機を使うのが一般的である。また、畳が敷かれることが半世紀前に比べて、減少している傾向があるが、近頃、和室の魅力に気づき和室を作ることが増えていることもまた事実である。それらの過程で拭き掃除という文化は薄れてしまっているように感じる。

小学校の教室のフローリング床は、雑巾がけするのに、家で拭き掃除はしない。そんなちょっとした矛盾で、文化の継続が経ってしまうのは、見過ごして良いことなのだろうか。

漆 生きた空間

私は、この町家が並ぶ通りで何軒か中に入らせていただける機会があった。その一つに花屋を営んでいる町家があった。店主に聞くと、その空間で育てたお花は一般的なものに比べて、長持ちするそうだ。RC造では、できないことがこの提案ではできるのである。花も人間と同じ生き物である。生きた空間で育てられることが良いことなのだと考えるきっかけになる。マツを建材として使う際、松ヤニ対策として木材を高圧窯で蒸して乾燥させる。強度の問題で乾燥木材にしたものも使用されることはある。現代人は、前者を選ぶ人が多いだろうが、松ヤニが出ることで何年たっても空間が生きていることの証明になる。そこで生活することが生き物として良い環境であると考え。